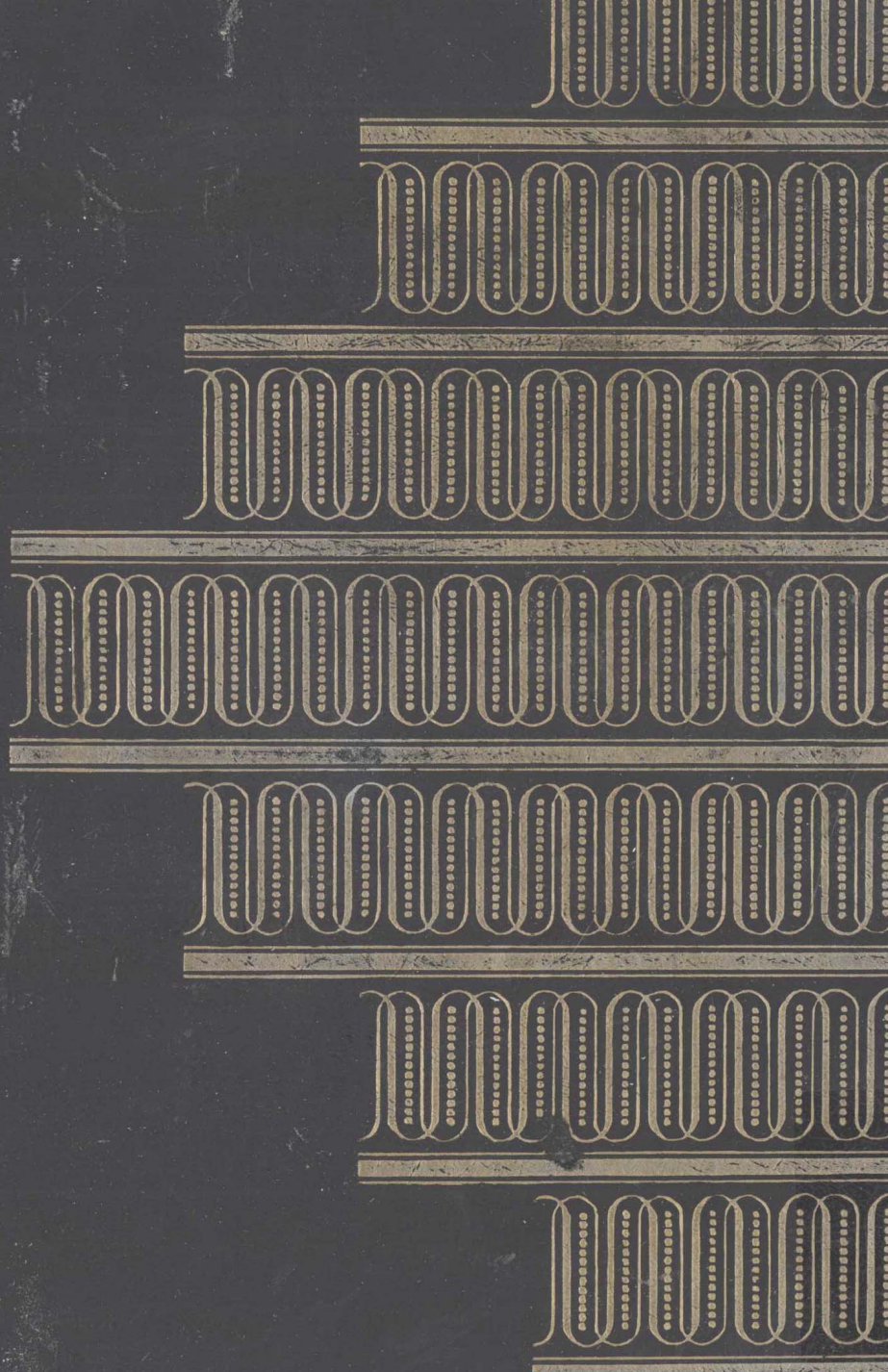

現代推理小説大系18

現代作品集

編集委員

松本清張
中島河太郎
佐野洋

講談社

現代推理小説大系 18

現代作品集

河野典生　石沢英太郎　大谷羊太郎
斎藤栄　西東登　佐賀潜　高橋泰邦
夏樹静子　西村京太郎　藤村正太

第1刷発行――――――――昭和48年8月8日

著者――――――――河野典生ほか

発行者――――――――野間省一

発行所――――――――株式会社 講談社

〒112　東京都文京区音羽2―12―21
電話　東京(03)945―1111(大代表)

印刷所――――――豊国印刷株式会社

製本所――――――大製株式会社

定価――――――――850円

©河野典生　ほか 1973

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0393-259189-2253（0）　(文2)

目次

殺意という名の家畜・河野典生 10

羊歯行・石沢英太郎 134

最後に笑う者・大谷羊太郎 172

臭教・斎藤栄 196

壺の中・西東登 220

地図にない沼・佐賀潜 240

六字の遺書・佐賀潜 262

天国は近きにあり・高橋泰邦 288

断崖からの声・夏樹静子――318

南神威島・西村京太郎――342

黄色の輪・藤村正太――376

名探偵は照れくさい？・西村京太郎――401

解題・中島河太郎――406

年譜――409

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

装幀 ---------- 伊藤憲治

イラストレーション ----------

殺意という名の家畜 ---------- 滝瀬弘

地図にない沼 ---------- 山口はるみ

南神威島 ---------- 林静一

現代作品集

河

野

典

生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

殺意という名の家畜

1

議論がとぎれたとき、女が、私の名前をたずねた。

女は大柄だった。地味な色彩だが、質のいい生地の服装で、顔の陰影を、ことさら、際立たせる化粧をしていた。適度に知的であり、適度に誇り高く、適度にコケティッシュな、典型的な銀座の酒場の女と云えるだろう。

議論は多分に酒のせいだった。

大学を卒業して五年ほども経った会社員が、同窓会を終えた二次会の席で、一種、おろかな感傷に駆られて、学生時代の抽象論をむしかえしてしまう、いわば、そういう性質の議論だった。

その夜の相手は、しかし、大学の同窓生ではない。文壇という余計者の村落への、ほぼ同期の入村者として知り合った仲である。

この一年の間、私はほとんど作品らしい作品は書かなかった。だが、文壇という村落の中にも、さまざまな格式の異なる部落があり、一度、この村落に登録された人間には、格式さえ気にしなければ、口を糊するだけの仕事は、向こうからやって来るものである。とうていしらふでは書けないような種類の、時には別名で書き飛ばす仕事を、いとわなければの話なのだが。

運動選手のようで、いささか、おかしな表現だが、いわゆるスランプがはじまった頃、かつて私の作品の一つを、出版してくれた会社の編集者が、印税先き払いのかたちでも、次回作を書き下ろすようにと、連日のようにすすめてくれたが、私は、机の前に坐って、感情を持続させる作業が苦痛でしかたがない状態なのだ、などという、あいまいな表現で、即答をさけていた。

そして、一夜の恥知らずな仕事で得た収入を、一夕の酒や、半日のクレー射撃の銃弾に変えてしまう生活を、くり返した。

私が六本木で知り合った金持ちのドラ息子たちと、保土ガ谷の射撃場の赤土に向ってライフル銃をかまえ、悪銭身につかずだなどと、うそぶいているのを目撃するに及んで、その最後の支持者もついに訪ねて来なくなった。

文壇に登場して、まだ二年か三年の青二才の分際で、甘ったれた真似をしやがって……。その編集者が、私についてしゃべっていたと、ある行きつけの酒場のマダムが、心配顔で伝えてくれたのは、それから一週間ほど後のことである。

私は、ある決心から、今日久しぶりに、文壇関係者の集まる会合に顔を出した。ほぼ一年二ヵ月ぶりのことである。

同傾向の作家で、同時期に登場したため、何かにつけて

比較されることの多かった若手作家の出版記念会だった。彼はその著書で、ある文学賞の候補になり、強力に支持する選者がいたため、社会的には受賞作同様の扱いを受けることになっていたのである。

私が会場に入って行ったとき、パーティは終わりに近づいていた。彼は十人ほどの男たちに取り巻かれて、通常はひどく蒼ざめた感じの顔に、一面血をのぼらせ、笑っているところだった。

入口に坐っていた娘のすすめる署名を断わって、私はそういう彼を見ていた。私は、自分で驚くほど無感動だった。

――どうしてる？　もう、ぼしゃったのかと思ってたぜ。

男の声に、私は振り向いた。かつて作品の映画化で交渉のあった映画会社の企画部員が腕の触れるほどの近くで、それが彼のくせの、ややロを歪める笑いを浮かべていた。私は笑い返した。

「いろいろ人生にはやることが多いんでね」

「人生を楽しんでるってわけか。ずいぶん、いい色に灼けてるじゃない」

「映画の助監督ぐらいには灼けてるだろう。原稿用紙のマス目を埋めるのも人生なら、猟銃をかかえて山を走りまわるのも、人生というわけだ」

私はそういい、やや垢じみた革上着から、煙草を抜き出してくわえた。企画部員のライターがのびて来た。

「ずいぶん悟ったようなことをいうじゃない。きみは、いったい幾つなんだ？」

私は、大きく吸い込んだ煙を、顔一面にひろがらせながら、自分の年齢を答えた。

企画部員は、ふたたびロを歪めて、じゃあ、おれより年下だと云い、よかったら、映画向きのシノプシスを書いてみないか、名誉はないが、収入はそう悪くないと云った。私は、今は気が向かないからと、即答を避けた。

そのとき、閉会の辞が終わり、取り巻きの間から、彼が抜け出して、まっすぐ、私に向かって歩いて来た。顔が紅潮しているせいで、ひどく白く見える歯で彼は笑っていた。

「久しぶりだな。今日は最後までつき合ってくれるだろう？」

わずかだが、私の精神の底に怒りのようなものが浮かんだ。それは、ひさびさの経験だった。その怒りは、理由のないものだったから、誇るべき怒りではない。いわば豚の怒りである。しかし、私はそのとき、思いがけないときに現われたこの感情を、そのまま取り逃がしてしまうのが、おしいような感じがした。

私は、彼と批評家や編集関係者の一団と共に、何軒かの銀座の酒場を流れて歩いた。夜半も過ぎて、彼のなじみの店にやって来たときは、つき合っているのは私だけになっていた。一年前、二、三度入った店だったが、女たちの顔ぶれは、すっかりちがっていた。

それから、私たちは自分が信じてもいない議論を、馬鹿ばかしい感傷に駆られて、はじめたというわけだった。

女が、肩に手をかけて、私の名前をたずねたとき、彼は、いくぶん女性的にみえるしぐさで女にしなだれかかった。

「岡田晨一さ」彼は私の名前を云った。

「え?」女がたずねる。

「岡田晨一だ。やはり同業者さ」

女が、もう一度きき返したので、彼は女の耳元で何かをささやいた。顔をそむけた私に、女の声が追いかけて来た。

「ああ。知ってるわよ、わたし」

こんなことを記すのはもうやめよう。このような〈鼠の競争〉は、今や、どこの社会でも見られる似たりよったりの出来事に過ぎない。また、私が他のありふれた男たちと同じく、その文字の象形への嫌悪から、〈精神の底のかすかな怒り〉などという、まわりくどい云いまわしで表現した、嫉妬心などというものは、より以上に記すに足りないことがらなのだ。

私の今書こうとしている物語は、それらとは全く関係がない。これは、小説ではなく手記なのだから。これら、すべてをさらけだそうと心に決めるまで、私は一年を要した。だが、彼の小説同様、商品として売られるものであることに、変わりはないのだ。

2

昨年(昭和三十七年)、九月十一日の小さな事件から書き起こさなければならない。

その娘から、電話がかかって来たのは深夜だった。

私は、暑い季節には、早朝から執筆をはじめるのが習慣だった。だから、深い眠りを、長い電話ベルで、起こされたというわけだった。

私は寝台から抜け出し、汗にまみれた肌を不快に感じながら、机上の受話器を取りあげた。

相手は名前を云い、ぜひ、話したいことがあると云った。

「どなたですか」

私は聞き返した。

「星村美智です」

「星村?」

芸名じみた名前だと思ったが、私には思い出せなかった。

「忘れました? ヴィレッジの会の帰りに……」

「ああ、きみか、わかった」

私は、腕をのばして寝台の上に投げ出してあったバスタオルを引き寄せ、首から胸へぬぐいながら、相手の言葉を待った。

ジャズのレコードを聞かせる店から、かけているものらしかった。私はきらいな方ではないが、受話器を通しては

喧噪にしか聞こえない。
「話って何だい」
私は、時計に目を落としながら云った。ややいらだっていた。
相手は何か早口でしゃべった。聞きとれなかった。私は、どなるように云った。
「何だって！」
「電話では話せないので、会ってほしいんだけど……」
早口だが、何故か平板にきこえる声が返って来た。
「会うって何時だ？」
「今、会ってほしいの」
「今はだめだ。仕事をためてしまって疲れてるんだ。今、眠らなきゃならないから、朝になってから、もう一度かけて下さい」
最後は切口上で、私は受話器を置き、汗まみれの首筋を、なぐりつけるようにバスタオルで覆った。
汗をぬぐっている間に、はっきり目が覚めて来た。私はタオルを持ったまま、机上の書きかけの原稿に目を落とした。たいして、内容に影響のある部分ではないが、文章のリズムからいって、気にいらない部分があった。何か、ぎくしゃくして、表現自体、浮きあがっているように思えるのである。私は立ったまま、その一節をぬりつぶし、欄外に書き変えた。ついでに、一枚前の原稿を読み返し、やはり、何個所か、私は書き変えた。私は裏返しになっている原稿を一枚ずつ引きめくってみて、際限なく同様の個所を発見し、腹立たしくなって、そのまま投げ出してしまった。
書き直しても、たいしてちがいはしないのだ。立ったまま読み返したから、気に入らないんだろう。椅子に坐って読み返したら、わざわざ、書き直す気になったかどうかわかったもんじゃない。私はそう思っていた。
三年ほど前、私は、ちょっとしたきっかけから、自分の小説が出版される機会を得た。いわゆる犯罪小説である。初版は六千部だった。そのうち四千部も売れただろうか。そして、二十代なかばに、なるかならないかの頃に、こういう状況に置かれたあらゆる青年同様、何かの会合へ出かけては、会場中が自分に注目しているように思ったり、日曜の街を歩いては、人びとのあふれている日本で、四千しか読者を持っていない自分を、ひどくちっぽけな存在に思ったりした。だが、私はその後、阿修羅のように小説を書きはじめたのだから、自分を卑小な存在だと感じて、立ちどまることはなかったのだ。
ただ、その裏返しで、卑小な自分の属している社会に対して、感受性で対抗しようと思いはじめたのだ。私は、紙の上で、自分の持っている欲望の飛翔を描き、自我の勝利を描こうとした。そして自分の発見した文体に酔い、なれ合いになった。
そのような青くささを指摘する批評家もないでもなかったが、一方、同世代の読者のそう多くはないが熱い支持と、私のような存在に郷愁を感じる年齢の読者の好奇心

が、二年間の私を曲りなりにも走らせて来た。

机上の原稿に手を入れるのを中止して、シーツの上に寝転がったとき、私には、かすかな不安があった。だが、私の小心さが、その不安を確認させなかった。

私は電話の相手のことを、考えることにしたのだ。

星村美智、一度だけだが、私は寝たことがある。

電話のかかる一年ほど前だが、ヴィレッジの会というものの発起人に、私は名前を貸していた。日本ビートニクの集まりと称する会合である。その旗上げパーティの夜、美智は小柄なからだを、ぴっちりした暗い色のセーターとスラックスで包み、ツウィストを踊っていた。広い額を強調するような、無造作に後ろへひっつめた髪型で、大きくはないが、陰影の多い目と、やや厚いくちびるをしていた。

美智は、薄い生毛に覆われている顔一面を、ほとんどくちびると同じ色に紅潮させていて、伏目で相手の脚の動きをみつめながら、ときどき、はっきりと白く見える歯で微笑を浮かべるのだった。私はその表情に未熟な官能のようなものを感じた。しかし、私がそれを感じたのは美智の顔に対してであって、激しく運動を続けている、まるで男の子のような、細い腰に対してではなかった。私は、もしかしたら、その動きの激しさに圧倒され、まず、羞恥に似たものを感じてしまったのかも知れない。

星村美智は、次々に相手を変えて踊っていたはずなのだが、私には全くその相手に関する印象がない。それは、私が美智に魅惑を感じていたと同時に、美智自身が、終始、ひとりで踊っているに過ぎなかったせいかも知れなかった。

会が終わりに近づいた頃、私は娯楽雑誌の記者の簡単なインタビューを受けた。話し終わって、振り返ったとき、赤いバックスキンのハーフコートの襟を立てた美智が、仲間らしい男女の間から抜け出して、まっすぐ近づいて来た。

最初に口をきいたのは美智の方である。仲間に私の名を教えられて、話ししてみたくなった。そう美智は云った。

美智の顔の紅潮は、まだ目のまわりに残っていて、小さくはないが、はれぼったいまぶたを、さらにはれぼったくしていた。

近づいてみると、そう小柄過ぎる方でもなかった。かかとの高い靴をはいていたとすれば、中背の私の、目のあたりまではあるだろう。しかし顔立ちのあどけなさと、細い、むしろひきしまった感じのからだつきが、まだはたちには間のある、娘の年齢を感じさせるのだった。

星村美智は、そのとき、私の、ある殺人を主題にした小説のあとがきの文章に、興味を持ったという話をした。

たとえそれが、一見計画的に見える場合でも、殺人の行為には、厳密な意味での動機というものはなく、人間がある状況に置かれたとき、ある瞬間に、精神のアラベスクの内側から、殺意はふいに浮かびあがって来るものだ。殺人に於いて重要なのは、その方法や動機よりも、むしろ、殺人の行なわれる状況ではないかと思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com